AMDA 海外リポート

4 カンボジア

AMDAカンボジア支部長

シエン・リティ医師(52)

原点は混乱期の難民救援 精神科医育成も急務

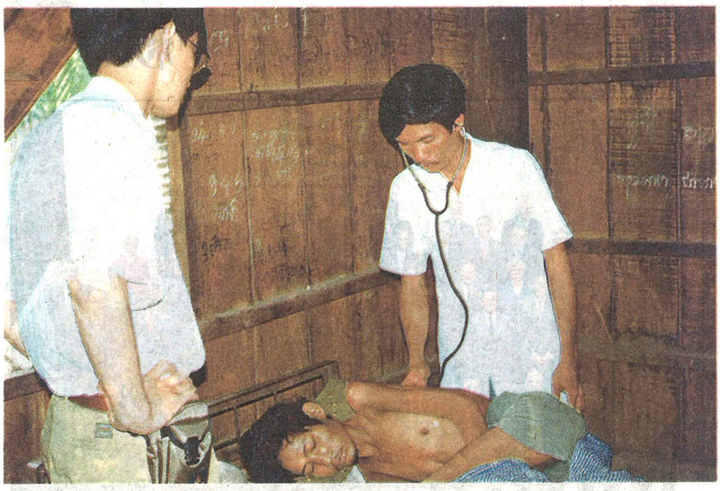
飢え、拷問、過酷な労働…。想像を絶するほど悲惨で悪夢のような日々でした。

私は200万人にものぼる大虐殺が行われたとされるポル・ポト政権の下で、生き抜いた1人です。

ポル・ポトが政権を掌握した1975年、私は11歳でした。父を含め親族20人が命を奪われました。知人らの言動を密告するよう強いられる中、口がきけないふりをして、ひたすら服従して働きました。生きるための子どもの必死の知恵だったのです。

政権が崩壊した79年以降も新政権とゲリラの間で内戦が続きました。国民は陸続きのタイ国境へ移動を始めました。荒廃した農地や都市機能の崩壊などで食糧が乏しかったからです。銃弾が飛び交う地雷原の中を命からがら逃げてきた約33万人で国境はあふれ、タイ領内に難民キャンプができました。

この混乱期にAMDAが産声を上げようとしていました。当時、勤務医だった菅波茂氏=現AMDAグループ代表=が79年、2人の医学生とともにタイに入ったのです。



カンボジアの住民を診察するAMDAの医師ら=1992年10月

しかし、組織がないため、正式に難民キャンプで負傷者や病人への支援ができずに帰国。アジア諸国の医師らとの組織づくりの必要性を痛感し、84年のAMDA(アジア医師連絡協議会)設立につながったのです。

AMDAは内戦終了後、カンボジアで帰還難民を対象に保健医療活動を実施。政権側の住人だけでなく、ポル・ポト派残党の支配地域でも巡回診療をしました。当時、日本のマスコミは「AMDAがポト派兵士も診察」と大きく報じています。

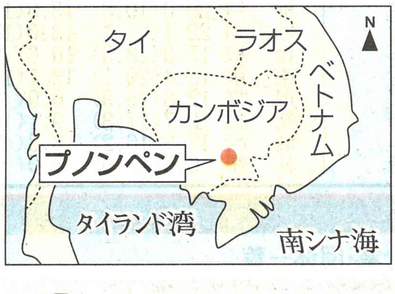
難民の祖国帰還が始まった92年、カンボジアは生活基盤が整っておらず、衛生環境も劣悪でした。医師や看護婦も大幅に不足していました。事態を重視したAMDAは「難民救援プロジェクト」を計画。相次いで医師らを派遣し、はしか、ポリオなど伝染病の予防接種、衛生教育に取り組みました。

その頃、私は医師となり、それまでの厳しい体験から弱い人々の立場を理解できるようになっていました。97年に菅波代表と会い、人道支援を目指す活動理念と使命感に感銘を受けました。カンボジア政府の役職を辞し、AMDAの活動に飛び込みました。

ここ20年間、カンボジアは「戦場から市場へ」を目標に掲げ、目覚ましい経済発展を遂げました。一方で、国民の約20%は貧しい生活を送っています。

ポル・ポト政権の恐怖政治の下で国民が抱えた心的外傷後ストレス障害(PTSD)も深刻で、精神科医の育成も急務です。

カンボジア難民問題はAMDAの原点です。今後もさまざまな課題を乗り越え、支援に全力を尽くしたいと願っています。



カンボジア　東南アジアのインドシナ半島南部にある立憲君主制国家。面積は約18万平方キロで、日本の半分程度。人口は約1500万人。国民の約90%がクメール語を話す。観光の目玉は世界的に有名なアンコールワット遺跡群。AMDAカンボジア支部は首都プノンペンにあり、1997年に設立。スタッフは15人。